

主 題：尽きることのない喜びの源

聖書箇所：詩篇16篇

テーマ：苦しみや困難に直面し、すべてが崩れ去ってしまったかのように感じる時、  
どこに喜びを見出すか

今朝、久しぶりに皆さんと見るのは詩篇のみことばです。1節から一つ一つ順に学び始め、前回最後に15篇を見てからはや数カ月がたちました。このペースで150篇までたどり着くにはどれくらい時間がかかるのかは私にもわかりませんが、きょうはこのダビデの記した詩篇16篇から私たちひとりひとりの歩みにとってとても大切な教えをともに考えてみたいと思います。

○苦しみの中で喜びを見出す方法：

まず詩篇16篇をお読みしたいと思います。

詩篇16篇 ダビデのミクタム

「:1 神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。:2 私は、【主】に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」:3 地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。:4 ほかの神へ走った者の痛みは増し加わりましょう。私は、彼らの注ぐ血の酒を注がず、その名を口に唱えません。:5 【主】は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保ってくださいます。:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。:7 私は助言を下さった【主】をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。:8 私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。:10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。:11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」

さて、この詩篇を通して皆さんに考えてほしい一つの問いがあります。それは苦しみや困難に直面し、すべてが崩れ去ってしまったかのように感じる時、あなたはどこに喜びを見出すかということです。私たちがこの問いに対して確固たる答えを持っていることは非常に大切なことです。なぜなら私たちは日々の生活の中で、いろいろな難しさや苦しみを経験するからです。ある時は自分の身に一体何が起きているのか理解できないような場面に直面したりもします。また、さまざまな場面で、痛みを味わい、喜ぶことが不可能に感じてしまうこともあります。ある人にとってそれはからだに関することかもしれません。病気やけがを患っていたり、また体が弱ってしまって、朝起きればあちこちに痛みを覚えてしまう、そんな中であって、一体どこに喜びを見出すことができるのか、そう疑問に思うこともあるかもしれません。ある人にとってそれは人間関係に関することかもしれません。家庭において、意見や価値観の違いから夫婦の間で問題が起きたり、親子の間においても難しさを感じることもあるかもしれません。また家庭だけではなく、友人や職場での関係においてうまくいかないこともあるでしょう。その中であって、一体どこに喜びを見出すことができるのだろうかと思ってしまうこともあるかもしれません。またある人にとっては、自分自身の信仰の歩みに関することかもしれません。罪との戦いに何度も負け、心から喜びや平安が失われてしまうことも私たちは経験しますし、さまざまな試練を味わって心が落ち込んで希望を見出すことができなくなってしまうようなこともあるかもしれません。神様がすべてのことを支配されているのだと知識として知っていたとしても、味わっている苦しみが長く

なれば長くなるほど、どうして神様は何もなさらないのであるか、なぜこんなことが自分の身に起きているのだろうかといった疑いや怒りを抱くことがあるかもしれません。私たちは先の見えない暗闇の中に置かれれば、一体どこに喜びを見出すことができるのだろうかと困惑してしまうこともあります。

私たちが普段苦しみということばと喜びということばを並べて聞けば、そこに矛盾を感じてしまうことがあります。それらは両立し得ないもののように感じたりもします。皆さんはこんなふう考えたことはないでしょうか？神様、私はこの苦しみが過ぎ去れば喜ぶことができます、今置かれている状況が改善さえすれば、自分を傷つけている人が変わりさえすれば喜ぶことが可能ですと。でも、嵐のど真ん中にいる時、それは無理です、喜ぶことなどできませんと。私たちは苦しみに直面する時、喜びを見出すことに難しさを感じてしまうことが確かにあります。でも私たちがこうしてみことばを見る時に、いつも覚えておかなければいけないことは、みことばはそれが可能だと教えているということです。では、一体どうすれば、どんな状況にあっても変わらずに喜びを持って生きていくことができるのでしょうか？自分の手には負えないような荒波にもまれる真っ只中であって、私たちはどこに平安や休息を見出すことができるのでしょうか？

今朝、私たちが見る詩篇 16 篇を通して、ダビデはそのことに対する答えを教えてください。残念ながら、この詩篇を書いた時にダビデがどのような状況に置かれていたのか、その歴史的背景について詳しいことはよくわかってはいません。彼がサウル王にいのちを狙われていた時だと考える人もいますし、彼の息子であったアブシャロムからいのちを追われていた時のことだと考える人もいます。

#### ●ミクタム (x 6 : 詩篇 16:1 ; 56:1 ; 57:1 ; 58:1 ; 59:1 ; 60:1)

また、詩篇 16 篇の表題に使われている「ミクタム」ということばが何を意味しているのかについては誰にもわかっていません。私たちに詳しいことはわかりませんが、おもしろいのは、このことばは詩篇の中で 6 回繰り返されていますが、この 16 篇と 58 篇を除いてすべてダビデが何らかの形で敵に直面している時のことを描いているのです。ダビデが具体的にどんな苦しみを味わっていたのかについてはわかりませんが、確実に言えるのは、この時のダビデはひどい苦難、もっと言えば死を意識するような危険の中に置かれていたということです。そんな嵐の真っ只中であつた彼が「**それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでる。私の身もまた安らかに住まおう。**」と 9 節で叫んでいました。彼の持っていたこの喜びは一体どこから来たのでしょうか？どうすれば私たちは彼が持っていたのと同じ喜びを持って、どんな状況にあっても変わらずに歩むことができるのでしょうか？

この詩篇 16 篇を通して、ダビデは苦しみの中で喜びを見出すための四つの方法を私たちに教えてください。それらがどのようなものなのかをともに考えてみましょう。

#### 1. 主に身を委ねること 1-2 節

まず、苦しみの中で喜びを見出すための方法の一つ目は、主に身を委ねることです。ダビデはこんな叫びをもってこの詩篇を始めていました。「**神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます**」と。ダビデの祈りは非常にシンプルなものでした。ここで使われている「お守りください」ということばには「注意深く観察する」とか「細心の注意を払う」という意味があります。つまり困難の中に置かれ、大きな苦しみを味わっていたダビデは神様を見上げて、天を見上げて願うのです。どうか私に目を向けてください、今の状態を注意深く見てくださいと。そしてどうか私を助け出してくださいと。ダビデは自分にとって必要な助けがどこから来るのかをよくわかっていました。

その証拠に彼はこの 1-2 節の中で、神様に対して三つの異なることばを用いています。まず最初に、1 節に出てきている「**神よ**」ということばは、「エル」という名が用いられています。つまりこれは神様が偉大な力を持ったお方であること、神様が最高の権威を持ったお方であることを表しています。次に 2 節の最初に出た「**【主】に**」と太文字で出てきていることばは「ヤハウエ」ということばが使われています。神様が自分と個人的な関係にある、そんなイスラエルの契約の神であることをダビデ

はここで表していました。そして最後三つ目に、2節の途中にある「私の主」の「主」ということばには“アドナイ”ということばが用いられています。これは神様が主権者なるお方、すべての支配者であることを表しています。

ダビデは自分が助けを求めている神様が一体どのようなお方なのかをよくわかっていました。だからこそ希望を見出すことができないような苦しみの中であって、まず真っ先にこの方に目を向けようとしたのです。神様、あなたはどんなものにも勝る力強い偉大なお方です。あなたこそが私と個人的な関係にある、すべてを支配されている主権者なるお方です。私はあなたのことを知っています。この困難から私を助け出すことができるのはあなただけだということをよくわかっていますから、どうか私を守ってくださいと。

ダビデの信仰はどんな状況にあっても揺らぐことはありませんでした。どれほど激しい嵐に遭ったとしても、どこに自分の身を避ければ平安を見出すことができるのかをよく理解していました。彼は主だけがどんな敵や危険からも自分を守ってくれる避け所であることを知っていたからこそ、この主にいつも自分の身を委ねようとしていました。思い返してみれば、ダビデはこの主が避け所だということこれまでにも見てきた詩篇の中で繰り返し教えていました。詩篇5:11に「こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。」とありましたが、7:1にも「私の神、【主】よ。私はあなたのもとに身を避けました。どうか、追い迫るすべての者から私を救ってください。私を救い出してください。」、また11:1の初めにも「【主】に私は身を避ける。」とあります。14:6にも「おまえたちは、悩む者のはかりごとをはずかしめようとするだろう。しかし、【主】が彼の避け所である。」と。ダビデは主が自分の避け所であることをよく覚えていました。私たちに感謝なことは、ダビデにとって避け所であったこの神様は、今の私たちにとっても身を寄せることのできる揺るがない避け所だということです。この方は決して変わることはないのです。

私たちがさまざまな苦しみに会う時に、普段皆さんはどんなものに拠り頼もうとしているでしょうか？何か問題が起こった時に、何か苦しみが起こった時に、どこに真っ先に平安を見出そうとするでしょうか？確かに私たちの周りにはさまざまな便利なものがあり、それらに助けを求めることはできます。でも私たちににとって十分で、そして何よりいつも変わらない助けはこの神様のうちにしかありません。だとすれば、私たちはどれほどこの方に信頼しようとしているのでしょうか？どれほど私たちはこの方のうちに身を委ねようとしているのでしょうか？同じ詩篇46:1-2、7の中でも「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。……万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。」と言われていました。彼はたとえ自分の周りを取り囲む状況が厳しく、不安や恐れでいっぱいになってしまっても、変わらずに主に信頼しようとしていました。

だからこそ彼は2節で「私は、【主】に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにありません。」」と続けます。彼ははっきりと「私の幸いは、あなたのほかにありません」と言っていました。この時、ダビデはひどい苦しみの中にいました。神様、あなたはどのようにしてこんなことをなさるのですかと言ってもおかしくないような、それほど厳しい状況の中に彼はありました。しかし彼が確信を持って宣言したことは「私の幸いは、あなたのほかにありません」でした。苦しみの真っ只中にある時に、私たちはダビデと同じようにただ主を見上げて、神様、あなただけが私の幸せです、あなた以外のものは何も望みませんと言えるのでしょうか？それとも自分の置かれている状況に不満を抱いたり、神様以外のもの、特に自分自身のうちに助けを見出そうとするのでしょうか？神様、まず自分の力でやってみます、でもどうしようもなくなったらその時は助けてくださいと。ダビデは自分のうちには困難に打ち克つための力が一切備わっていないこと、自分の力ではどうしようもないことをよくわかっていました。また、彼はただ知識として、主が避け所であることを知っていたのでもありませんでした。彼は

この神様を個人的に知っていたからこそ、この方だけが救いを与えてくださるお方だと信じていたからこそ、心もからだもすべてこの方に委ねようとしたのです。私たちが苦しみを経験する時に、必要な助けはこの主から来ます。だからこそこの方がどんなお方かを覚え続けることです。そしてどんな時も身を委ねて歩むことです。そこに私たちは喜びを見出すことができます。

## 2. 兄弟姉妹と交わりを持つこと 3-4節

次に、苦しみの中で喜びを見出す方法の二つ目は、兄弟姉妹と交わりを持つことです。ダビデはこのように3節を続けていました。「**地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。**」と。ダビデはここで一体何を言わんとしたのでしょうか？簡潔に言えば、ダビデはこの地上にあって、彼と同じように主を愛し、主に従おうとする聖徒たちと一緒にいることが自身の喜びなのだということです。主によって罪赦された兄弟姉妹との交わりの中に彼の喜びのすべてがあったのです。

確かに私たちが苦しみや痛みと直面した時、神様に助けを祈り求め、この方に身を委ねることは大切なことです。ダビデも2節で「**私の幸いは、あなたのほかにはありません**」と言っていました。しかし、覚えておかなければいけないのは、主に信頼するということは、決して自分自身をほかの兄弟姉妹から孤立させるものではないということです。ダビデは主を見上げることの必要性を述べたその直後に、兄弟姉妹との関係性について触れました。つまり私は神様にのみ信頼していれば大丈夫なのだ、ほかの兄弟姉妹の助けなど自分には必要ないと言える人はひとりもないということです。

でも実際はどうでしょう？皆さんもこれまでにこんな経験をしたことがあるかもしれません。さまざまな困難を経験する中で、その痛みが増し加われば増し加わるほど自分自身の殻に閉じこもって、ほかの人との関わりを避けようとしたり、人と関わることにはいろいろな犠牲や難しさを伴うことをよく知っているからこそ、自分が大変なことを経験している時は兄弟姉妹とともにいることよりもひとりになることを望み続けたり。また、苦しんでいる自分自身の罪深い愚かさや弱さをほかの人に知られたくないからこそ周りの人と距離を取ってみたり。私たちはさまざまな場面で兄弟姉妹との交わりを持つことに難しさを覚えることがあります。でも私たちが見なければいけないのは、ダビデはそんなふうには考えていなかったということです。彼は確かに主に揺るがぬ信頼を置いていました。しかし同時に、自分ひとりで苦難の中を歩もうとするのではなく、同じ神様、同じ主を見上げる者とともに歩いていくこと、ともにいることを望んでいたのです。そしてそのことを彼は自分の心からの喜びとしていました。ダビデは同じ詩篇133:1の中で「**見よ。兄弟たちが一つになってともに住むことは、なんといいあわせ、なんといい楽しさであろう。**」と言っています。ダビデはそのように考えていました。

私たちはこのダビデと同じような思いを持っているのでしょうか？兄弟姉妹との交わりは私たちにとって必要不可欠なものです。私たちの歩みには同じ主を愛する神の家族が必要欠かすことができません。でもそう聞いてすごいと思いませんか？私たちは聖書の教える教会のあるべき姿について数カ月かけて見ましたけれども、その大切さは新約の中だけではなく旧約を通しても教えられているということです。聖書は何度も、私たちはひとりで歩むのではなく、兄弟姉妹と歩むのだと教えているのです。私たちが苦しみを経験する時に、私たちは確かに個人的に主に祈ることができます。それはとても大切なことです。でも同時に、その抱えている重荷をほかの兄弟姉妹と分かち合って、祈り合うことができます。試練を経験している時に、互いに励まし合うことも、支え合うことも、知恵を教え合うこともできます。またそれぞれがそのような苦しみの中にある時に、特に罪に陥って心が頑なになってしまわないように助け合うこともできます。

ヘブル3:12-13ははっきりとこう教えていました。「**兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。**」と。聖書が繰り返し私たちに教えていることは、信仰生活というものはひとりで生きていくものではないということです。よい

時も悪い時も、苦しみの真っ只中にある時でさえ同じ主を愛する者と交わりを持つことが私たちにはできます。そしてその交わりを通して、自分のうちに、また相手のうちに働かれる主のすばらしさとともに感謝し、分かち合うことができるのです。私たちはここに喜びを見出すことができるとダビデは教えました。

しかし、ダビデは、私たちはほかの聖徒との交わりの中に喜びを見出すことができると言って、そこで終わったわけではありませんでした。彼はその後4節で「ほかの神へ走った者の痛みは増し加わりましょう。私は、彼らの注ぐ血の酒を注がず、その名を口に唱えません。」と続けています。ダビデはここで聖書の神様を愛し、この方に従おうとする聖徒たちとほかの神を愛して偶像礼拝をするような者たちを対比して、そのような者たちがいかにむなしい存在なのかを教えようとしています。「ほかの神へ走った者の痛みは増し加わりましょう」、ここで「痛み」と訳されていることばには「悲しみ」や「苦悩」という意味も含まれています。要するに、ダビデは避け所であり、唯一喜びを、唯一幸いを与えてくださる神様を拒んで、この方以外のものを追い求めるような者の心の中には喜びではなく、悲しみが増し加わることを教えています。

聖書の教える神を離れていくのであれば、あなたたちの心には悲しみが増し加わるのだ、でもこれこそまさに神様に逆らって生きようとする罪人の姿です。思い出してみればアダムとエバもそうでした。彼らは神様のことばに従うことよりも自分たちの願いに従うことが好ましい結果を生むと思ったのです。でもその結果、彼らは喜びを失うばかりか、神様からのさばきを受けました。私たちも同じで、救われる前の私たちは神様以外のところに喜びや満足を見出そうとして生きていました。聖書の神様に目を向けることよりも、この方以外のどこかに自分の心を満たしてくれるものがあることを願って、次から次へといろいろなものを追い求めていたのです。でもその結果、私たちの心はいつまでも満足を覚えることがなく、どれだけの物を手にしたとしてもむなしさや悲しみがその心を支配したのです。ですからもし今皆さんの中に、神様以外のものを追い求め、心のうちに渇きや痛みを覚えている方がおられるのなら、きょうダビデが言っているこのことばによく耳を傾けてください。神様を忘れ、自分の望みのままを生きる者の行き着く先は悲しみだと彼ははっきりと言っていました。たとえ今一時的な喜びを見出すことができているとしても、時間がたてばあなたの心はむなしさを覚えます。そして何よりもそのような者を待っているのは、神様からの永遠のさばきだということを聖書ははっきりと教えています。今だけむなしいのではなく、今だけ悲しいのではなく、永遠の悲しみが待っていると。だからこそ心の中に渇きを覚えている方がいるのであれば、きょうその心を満足させることができる唯一の方であるイエス・キリストを信じて、この方に従う者としての歩みを始めてください。この方の救いにあずかり、自分を悔い改めて、この方にすべてを委ねて生きる人生を始めてください。ダビデは神様に逆らって生きる者の歩みがいかにむなしいものであるかよく知っていました。だからこそここで、私はそんな者たちと同じようには歩まないと言うのです。「私は、彼らの注ぐ血の酒を注ぐ」こともない。言いかえれば、彼らと一緒に別な神に捧げものを捧げたり、礼拝することなど絶対にしない。また「その名を口に」して唱えることもしない。ダビデは神様を愛して従う者とは喜んで親しい交わりを持とうとし、逆に神様に逆らって歩む者とは交わることを拒んでいました。

もちろんこれは私たちが未信者から距離を取って、福音を伝えることをしないということではありません。私たちはまだ主を知らない人たちを愛して、その人が必要としている救いを伝え続けるという責任は持っています。しかしここで問われていることは、私たちが誰とどのように時間を過ごしているかということです。同じ主を愛し、主に従っていきたく望む者たちと一緒にいることを自分の喜びとしているのでしょうか？それとも主を知らない、主の忌み嫌われることをし続けている者と一緒にいることに楽しみを見出しているのでしょうか？苦しみの中であって、私たちに必要な助けは主から来ます。しかし同時に、同じ主を愛する兄弟姉妹との交わりを通して私たちが喜びを見出すことができるのです。

### 3. 主の働きにいつも心をとめること 5-6節

ダビデが教えてくれている苦しみの中で喜びを見出す方法の三つ目は、主の働きにいつも心をとめることです。言いかえれば、主が自分のうちにどのようなことをなし続けてくださっているのか、主がどれほどのあわれみをも示してくださっているのかをいつも忘れないでいるということです。苦しみの中にいたダビデは、神様が自分のうちになしてくださっていることを思い起こそうとしていました。この5-8節を通して大きく二つのことが書かれています。

#### a) 主から与えられた祝福 5-6節

まず一つ目に彼が思い起こそうとしたことは、主から与えられた祝福でした。5-6節に「【主】は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保ってくださいます。測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」とあります。ここには幾つかの比喩的表現が用いられているので少しわかりづらかったかもしれません。少しずつ見てみましょう。まずダビデは「【主】は、私へのゆずりの地所」だと言っていました。この「ゆずりの地所」ということばを用いた背景には、恐らくかつて約束の地カナンをイスラエルのそれぞれの部族に分配した時のことがあっただろうと考えられます。イスラエル部族は神様から祝福として、彼らが住める土地をそれぞれに分け与えられました。しかし、その中でレビ族だけは土地の代わりにあるものが相続地として与えられていました。そのことが民数記18:20に書かれています。「【主】はまたアロンに仰せられた。「あなたは彼らの国で相続地を持ってはならない。彼らのうちで何の割り当て地をも所有してはならない。イスラエル人の中であって、わたしがあなたの割り当ての地であり、あなたの相続地である。」と。彼らが土地の代わりに受け取ったものは主ご自身でした。ですからダビデがここで「【主】は、私へのゆずりの地所」なのだと言った時に考えていたことは、自分には祝福としてほかの何物でもない神様ご自身が与えられているのだということです。私には主が与えられていると。

またダビデは続けて「私への杯です」ということばも加えていました。この「杯」ということばは、聖書の中でその人の運命や結末を表現するために用いられています。例えば主に逆らう者に対してこの「杯」ということばを用いれば、それは神様からのさばきを意味していました。以前私たちが見た詩篇11:6には「主は、悪者の上に綱を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となろう。」と書いてありました。神様に逆らって歩む者に対する「杯」、運命というものは神様からのさばきだと。また逆に、主の前を正しく歩む者に対して「杯」ということばが用いられた場合は、主の恵みがあふれているということを意味していました。詩篇23:5には「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」とあります。ダビデがここで、主が「私への杯です」と言ったのは自分の運命、結末は愛する主が握ってくださるということです。たとえ今自分がどのような状況に置かれていようとも、すべてを支配されている主が自分の運命をご存じでいてくださる。それが苦しみの中にあろうとも、避け所であるこのお方が自分のものとして与えられていると。彼にとってこの事実は何事にも代えがたい大きな祝福、恵みでした。

そしてダビデは6節に「測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」とも記していました。この「測り綱」というのは土地の大きさを測量したり、土地と土地との間に境界線を引くために用いられたもので、「測り」として使われていたのです。それが「私の好む所に落ちた」、ダビデが神様から与えられた祝福は、あらかじめ神様が彼のために定めていたものだという事です。しかも神様が定めてくださったそれらすべてが彼にとって最高のものだと。ダビデに与えられた祝福は偶然与えられたものではなく、神様が測って彼のために備えてくださったすばらしい物だということを彼はよくわかっていました。だからこそ自分の人生の中に神様から与えられたすべてのものが自分にとって最善であり、自分にとってすばらしいものであることを感謝していたのです。

ひどい苦痛の中にあつて、ダビデは置かれている状況に目を向けるのではなく、自分のうちに既に主によって与えられている祝福に心をとめていました。自分にはいつもともにいてくださる神様が与えられている、自分の置かれている状況も運命もすべてその神様が見守っていてくださると。そして自分にはふさわしくないような最高の祝福があわれみ深い神様から与えられていると。置かれている状況に心がとらわれて、不満を口にしたり、不安になることは容易なことでした。しかし彼は自分のうちになされた主のすばらしい働きに思いをめぐらせていたからこそ喜ぶことができたのです。

#### b) 主から与えられる助言 7-8節

続けて、ダビデが心をとめようとしたものの二つ目は主から与えられる助言です。7-8節に「私は助言を下さった【主】をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。」とあります。ダビデは主がどのようなお方なのか、どのような祝福を与えてくださっているのかをよく心にとめようとしていました。しかし同時に、主が自分に必要な助言を与えてくださるということをはめたたえていたのです。この詩篇はいろいろな例えや難しいことばが使われていますけれども、7節にも不思議な表現が用いられています。聖書の7節の欄外に「腎臓」とあります。7節を直訳すれば「まことに、夜になると、私の腎臓が私に教える」となります。こう聞いたら、おかしな表現に思いますが、当時の人たちにとって腎臓というのはその人の良心であったり、物事を判断するための中心となる部分がある場所だと考えられていました。つまりこのことばは、何が正しくて何が間違っているのかを選択し、決断する、私たちの行動を生み出してくれる心というものを表しているのです。ですから、今の聖書では「私の心が私に教える」と訳されています。ここでダビデが言わんとしたことは、ダビデが夜静まって主との時間を持つ時に、自分の愛する主は自分が正しく歩いていくために必要な知恵や助言を与えてくれる。自分が物事を判断するのに必要な知恵や助言を主はみことばを通して私に教えてくれる。必要なその助言を通して、その助言を心に与えることによって、自分自身を正しい方向へと導いてくださる、そのことをダビデはほめたたえていたのです。

彼はすべてを支配されているその主の主権に信頼するだけでなく、この主のみことばが自分の歩みをいつも導いてくださることに確信を抱き、いつも主の知恵に自分を委ねていました。主に信頼し、そして主のみことばにいつも心を満たそうとしたのです。これは私たちにとってもとても大切なことです。もしかしたら皆さんの中にこんなことを聞いた人もいられるかもしれません。苦しみや試練を経験する時に神様がすべてのことを支配されていることを私はよく知っています、だから神様が何かをされるまでは何もせずにとにかくみこころがなされることを祈ってまいりましょう。もちろん私たちにとって祈ることは大切なことですし、主のなされるわざに期待して待ち望むことも大切なことです。でもダビデは、ただ主を、ただ主権者なる神様に信頼を置いてあとは何もしません、それで終わりではありませんでした。彼は苦しみの中にあつて、主に信頼し、そして主のみことばを心に蓄えて、その助言に従って歩もうとしたのです。

同じように、私たちに必要なことはいつも神様のうちに確信を抱くこともそうですけれども、この方のみことばに従って歩み続けることです。どんな時も私たちに必要な知恵や訓戒、慰めや励ましというものを与えてくださる聖書に根差すことです。そうすれば、どのような結果が生まれるのか、そのことが8節に書かれていました。「私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。」、ダビデはどんな状況にあつても確固たる確信を持っていました。それは自分の前に主を置いて歩めば、決して揺るがされることはないのだという神様への信頼でした。彼はすべてを支配されているそのお方がいつも自分の目の前のように歩もうとしていました。いつもこの方のみこころを祈り求め、みことばに記されていることに聞き従い、神様が喜ばれることを何よりも追い求めていこうとしたのです。私たちが覚えておかなければいけないことは、どんな状況にあつたとしても、ダ

ビデを支えた揺るがぬ確信は彼のうちから来たものではなかったということです。彼の持っていた確信は彼がいつも主を覚え、この方の教えに喜んで従う時に持つことができたものでした。私たちもよく知っているとおりに、箴言3：5－6に「心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」とあります。

私たちのうちに困難や苦しみに耐え抜く自分の力はありません。しかし、主がいかにすばらしい働きを自分のうちになしてくださったのかをいつも覚えて、主がみことばを通して与えてくださる訓戒に従って歩いていくのであれば、私たちはそこに揺るぐことのない喜びを見出すことができます。

#### 4. 将来に希望を置き続けること 9－11節

最後に、苦しみの中で喜びを見出す方法の四つ目は、将来に希望を置き続けることです。ダビデは9節で「それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。」と述べていました。ダビデは主がいつも自分とともにいてくださることを、主のうちに平安が与えられていることを心の底から喜んでいました。でも私たちがいま一度覚えたいことは、このことばを記したダビデの状況はこれまでと何ら変化がなかったということです。彼は変わらずに非常に大きな困難の真っ只中にいました。彼は10節を見てもわかるとおり、死の危険が身近に迫るような苦難を変わらずに味わっていました。人間的に考えれば、まるで先の見えない暗闇の中にあっただけです。でもそんなダビデが10節で「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」と言うのです。ここでダビデが言わんとしたことは、主がいつもともにいてくださるから自分は今最高の喜びを持っている、でもその喜びはこの世で終わるものではない。自分が死んだ後も変わらずに続くものだということです。

ダビデは今の喜びを、今の助けを求めていました。でも同時に、彼は彼が死んだ後どうなるかよくわかっていたのです。主は自分が生きている間も、また死んだ後も見捨ててしまわないお方であることをダビデは信じていました。ダビデは苦しみの真っ只中であって、今与えられる主の助けに対して喜んでいただけでなく、自分の死後さえもそこに主の助けがあることを疑うことは全くありませんでした。一体どうしてダビデはこんなに揺るがぬ確信を持つことができたのでしょうか？どうして彼は死なども恐れなかったのでしょうか？一体なぜ彼は死の危険が迫っている中であって喜びを持つことができたのでしょうか？それはこの詩篇をダビデが記した時に、彼は自分自身のことではなく、死を打ち破り、墓からよみがえられるお方が来ることを覚えていたからでした。ダビデはいずれ現れ、死の力に完全に勝利されるその方に希望を置いていたのです。誰のことかわかりますか？イエス・キリストのことです。

ペテロは私たちにそのことをはっきりと教えてくれています。使徒2：22－32を開いてみてください。少し長いですがけれども、このことばをよく見てください。ここでペテロがメッセージを語るのです。22－32節「イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。ダビデはこの方について、こう言っています。『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。主は、私が動かされないように、私の右におられるからである。それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。さらに私の肉体も望みの中に安らう。あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。あなたは、私にいのちの道を知らせ、御顔を示して、私を喜びで満たしてください。』」と、今読んだところが詩篇の引用になります。そしてその続きに「兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとりをして彼の王位に着かせると誓って言われたことを



知っていたのです。それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。」と。ダビデはひどい困難の中であろうと、たとえ自分が死ぬことになろうとも平安を失わずに希望を持って生きることができました。その理由は、彼が預言者だったからこそイエス・キリストがいつの日か必ず死に勝利して復活されるということをよく知っていたからでした。だからこそダビデは確信を持つことができたのです。神の子であるイエス・キリストは必ず死から復活される。この方が墓の中にとどまって朽ち果ててしまうことは絶対はない。だとすれば、キリストがよみがえられたのと同じように、自分も死んだままで置かれていることはないのだと。

このことについてはパウロもこのように言っていました。Iコリント15:20に「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」、キリストの復活はダビデに、今を生きる時も、また死んだ後も揺るがぬ希望を与えました。そしてその同じ希望が今の私たちにも与えられています。私たちの愛する神様は、どんな困難にあっても私たちに必要な助けを備えてくださる、助けを与えてくださるお方です。どんな嵐に会おうとも避け所としてともにいてくださるお方です。しかしそれ以上に、十字架にかかって死なれ、死の力を打ち破って勝利されたイエス・キリストはご自分を信じる者に死んだ後もともに生きるという希望と確信を与えてくれるのです。キリストが死に勝利されたからこそ、私たちはもう死を恐れる必要がなくなりました。この方が死に勝利されたからこそ私たちは希望を持って生きていくことができます。どんな苦しみの中にあっても、この方にあって私たちもダビデと同じように将来に希望を見出して生きていくことができます。

苦しみの中で喜びを見出す方法は、私たちのうちからはやって来ません。イエス・キリストの十字架とその復活のわざを覚えることです。パウロはローマ8:35、38-39で「私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。……私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。」と言っていました。イエス・キリストの復活を見れば、そこに私たちの希望を見出すことができると。ダビデはそこに喜びを見出しました。私たちもそこに喜びを見出すことができるのです。

## ○まとめ

さて今朝、まず皆さんに、苦しみや困難に直面し、すべてが崩れ去ってしまったかのように感じる時に、あなたはどこに喜びを見出しますか？という問いを考えてもらいました。皆さんの答えは何でしょう？ダビデはこの問いに対する答えを11節で「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」とまとめていました。ダビデが喜びを見出した相手、それはほかのだれでもない神様でした。この方だけが自分に必要な助けを唯一与えることができる方、いのちを与えることができる方だとそう確信していたからこそ、彼はこの方に身を委ね、同じように主を愛する者と交わりを持ち、自分のうちになされたその主の働きを覚え、そして将来に希望を置いて、苦しみの中にあっても喜びを持って歩むことができました。私たちはどうでしょう？私たちは確かにさまざまな難しさを日々経験します。喜びを見出す鍵は、尽きることのない喜びの源である方に私たちが目を向け続けることです。主がどのようなお方かをいつも覚えて、同じ主に信頼する兄弟姉妹とともに励まし合うことです。キリストのわざに目を向けて、この方にある救いを覚え続けることです。たとえどんな状況に置かれることがあったとしても、私たちにとっていつまでも変わらないことのない、いつまでも絶えることのない喜びの源である神様に目を向けて生きることです。そのような者として日々を歩んでいきましょう。